

## 高齢者の生活空間としてのニュータウン

—藤沢市湘南ライフタウンを事例にして—

武藤 由紀子

日本で高齢社会の到来についての議論がされるようになって久しい。ニュータウン建設ラッシュから数十年の歳月が経過した現在、初期に建設されたニュータウンではすでに住民の急激な高齢化が問題になっている。

本論文は、若い核家族世帯にとっての快適な生活空間としてつくられたニュータウンが、果たして高齢世代にとっても快適なものであろうかという問題意識に基づき、実際にニュータウンに住む高齢者と次期高齢者への聴き取り調査を通して、高齢者の生活空間としてのニュータウンを考えていくものである。当然、施設や住居の構造改善等のハード面の充実や、現行制度の見直し、高齢化に対応した新制度の検討等の行政面の充実が求められることになるが、本論文の主たる目的は、ニュータウンのそうした不備を指摘、糾弾することにあるのではなく、住環境の整備はもちろん、今後ニュータウンで高齢を迎える住民自身に何が求められているのかを探ることである。

本論文の対象地域である藤沢市の湘南ライフタウンは、神奈川県藤沢市の西部に位置する、事業面積378ha、計画人口45,000人のニュータウンで、昭和42年に着工、同50年に第一次入居が始まった。現在は地域の老年化指数が市内の他地域に比べて際立って低い、若い街であるが、じわじわと高齢

化に向かっている。

聴き取り調査は、地域高齢者へは対面形式、次期高齢者（40代後半から50代）へはアンケート形式で行なった。双方の結果の分析を通して、人数が最も多く地域の中心ともなっている次期高齢者と、高齢者とは、ライフスタイルの差や意識のズレがあり、そのことが、湘南ライフタウンを高齢者が生活する街としてふさわしくないものになっていることがわかった。具体的には、「地域の高齢化への施策を考えると、我々は医療機関の充実や高齢者向け施設の配置など、自分の日常にはない『高齢者のための』『特別なこと』にばかり目を向けがちであるが、『買いものに不便』『移動に不便』といった日常生活の環境の不備こそが、高齢者の生活の枷になっている」といったことである。

したがって、ニュータウンが高齢者の住む街として適したものになるためには、住民が高齢者や高齢化問題を身近な存在として捉え、また、自治意識を持って地域に関わっていくことが必要であろう。そして地域には、医療施設や福祉サービスの充実はもちろん、特定の団体に属さなくても新しい人間関係や地域への愛着が生まれるような、人々が気軽に集える場をつくることを提案する。

## 丸亀市の団扇製造業

村井 葉子

香川県丸亀市は古くから団扇の産地として発展し、今日でも全国の団扇生産量の約90%が丸亀市で生産されたものである。丸亀市での団扇製造業の起源は江戸時代に遡りその歴史の古さは300年以上にも渡っているのだから、現在では扇風機、クーラー等の普及で人々の生活のなかから団扇は消し去ろうとしている。本論文では、丸亀の団扇製造業を様々な方面から調査し、丸亀の団扇製造

業者がこのような時代背景にいかに対応しているのかを探ると同時に、丸亀が団扇の産地として今日まで存続できた要因を明らかにすることを目的としている。

研究の方法としては、文献調査、統計の分析、現地での聞き取りが主なものである。現地での聞き取り調査は、昭和40年代以降の団扇販売本数に与えたと思われる業界内の出来事や、生産、流通